

河井道と園芸教育

学園長 大口 邦雄

河井道は園芸教育を、どのような意図からとりいれようとしたのか。「わたしのランターン」からは、少なくとも二つの意図が読み取れる。

一つの動機はスミス女学校で、お道さんが小さな土地を与えられ、野菜を育てる経験を持ったことに由来する。それは農家の出身でなかった彼女にとって、自然と親しみ、命の尊さを学ぶ初めての機会になった。優れた教育者の資質を持った河井道は、園芸がこころの教育に有用な手段であることに気づいたのであろう。この面は現在、中高も大学も、園芸の授業を必修にすることによって伝統的に継承され、一定の成果を挙げている。

もう一つの動機は、農業とは無縁のスミス先生が、生徒たちに手伝わせつつ自ら花を植えて、粗末な校舎の校庭を花で飾ったことに、お道さんが感動したことである。それが伝統的な華道の世界とは、どこかやはり異質のものだったことは、通りすがりの人々が珍しそうに門の中を覗き込んで行ったという事実に見られている。サラ・スミスはニューイングランドの文化を持ち込んだのであろう。身のまわりに自らの手で美しいものを創造しようとする河井道の女性らしい理想が、園芸の専門家を育てる女性の学校を創ろうとする意図につながった。

1926年、河井道は新しい学校を創立するに先立って、視察のためアメリカに渡り、園芸の源流が英国にあることを知ってケント州のスワンレー園芸学校を訪ねた。恰もこの時期は、ヴィクトリア期の英国で今日イングリッシュガーデンと呼ばれるようになった様式が完成した直後のことであり、かつ庶民の文化として浸透して行った時代でもあった。

太平洋戦争末期は極端な食料不足だった。それまで都会育ちの女性は、土に触れることなどまずしなかったが、庭先でカボチャを育てるのに四苦八苦した。機を見るに敏だった河井道は、農業に携わる意図のない女性たちが、土に親しまざるを得ない環境にあるこの時こそ、女子の農芸専門学校を興すのに良い機会と見た。またそれは、文部省の認可を得る上でも、またとない機会だったのである。しかし本当の意図は、食料生産よりも、サラ・スミスから学んだこと、つまり女性が自ら花を植えて、身の回りに美しい環境を創りだす園芸という、全く新しい発想を実現することだったと思われる。

食料不足の時代はすぐに過ぎ去った。しかし、文部省が園芸を農学とみなしていたこと、日本の農学がもっぱら生産者にとっての農学であったために、園芸短期大学は、生産者のための農学的園芸の道を歩まざるを得なかった。日本の伝統的な農村のあり方とは異なる、近代的で合理的な農園の経営に進む女性たちを幾人か生み出した功績は、無論あったと思うが、この方面で、規模の大きな農学部とまともに競合することは難しい。園芸は本来個人が、生産的意図よりも、文化的意図によって営むものであろう。その場合、自然科学などの分野において、どんな優れた理論家でも、決して実験をおろそかにせず、実験に関わる基礎的な技術を身につけると同じように、文化的意図から営まれる園芸といえども、その道の専門家になるには、実際土に親しみ、花や果樹を育てる実習を積み、また、土壌や肥料などに関する知識を習得するなど、基本的な農学的知識や技術を疎かにすべきでないことは言うまでもない。しかしそれは必要な基礎的技術であって、目的ではない。短期大学は、社会が必要とする技能を専ら身につける高等教育機関となって行ったのであるが、園芸短期大学が生き延びられなかったのは、そもそも園芸が単なる農学的技能に終わるものでなかったことに、一つの原因があるだろう。

河井道がイギリスの園芸学校で感動したのは、完成された見事な庭園の様式とともに、まるで普通の住宅のような学校で、窓から見る景色が絵のように美しいことや、昼間野良で労働した女性たちが、きちんとした身な

りに着替えて食事をし、世界の出来事について知的な興味を抱いていることであり、デンマークを訪ねて感動したのは、よく整えられた室内装飾がすべて家庭の婦人の手で作り出されたものであったこと、などであった。実際私も英国で生活をしていたとき、つくづく感心したのは、たとえばイギリスにはどこにでもあるような B and B (ベッドと朝食だけを給する小さな宿泊施設) で、用いる茶碗などの器物やテーブル、カーテンなど室内の装飾に工夫を凝らし、窓から見える景色が、どこから見ても絵のように美しく見えるよう、デザインされていることであった。どこの家庭もこのように工夫を凝らすので、都会的なホテルよりも B and B を家庭的と彼らは感じるのである。また、有名なガーデンを訪れると、庭ばかりでなく建築のデザインや、境界の外に広がる景色さえもが、ガーデンと調和する景観を自然に構成していることである。景観美は放置された自然ではなく、人の手によって創られ保たれている自然、人と共存する自然である。つまり園芸は、単に個人の狭い領域における営みにとどまらず、その同じ心が景観美を構成するという心配りにおいて、公共の施設をはじめ、社会一般に広く重要な価値観として行き渡っていることの上に立っている。このように文化的、社会的広がりの上に立つ園芸を、どのように学問的に組織し、実践するのか、それを考えなければ、河井道が抱いた園芸の理念を、高等教育の分野で実現することはできないと思われる。

私は、恵泉女学園の園芸教育の意図を、日本人全体にこのような美意識を行き渡らせ、本来美しい自然に恵まれたこの国を、世界で最も美しい国と言われるようにするという、壮大な夢をもつことに置かねばなるまいと思うのである。それは平和を愛する国民として生きて行こうとする日本の、新しい国造りのイメージに合致するものと私は確信する。